

西南シルクロード：「茶馬古道」に関する民族文化的研究

その1. 「麗江」 —民族文化の回廊—

宗 ティンティン*

An Ethnic Cultural Study on the Southwest Silk Road

(茶馬古道：The Ancient Routes of Tea and Horses)

Part 1. Li Jiang —The corridor of ancient ethnic culture—

Tingting ZONG*

1. 茶馬古道の社会的機能

中国雲南省の独特な地形と気温の関係で、長い間、商品の流通と文化交流の手段の大半は「馬幫」^{ma bang}（荷馬隊）に依存しており、その結果独特な「馬幫文化」が形成された。

「茶馬古道」の名前があるように、驢馬が茶葉を運ぶ道でもある。雲南省のプアル茶を、険しいヒマラヤ山脈を通してネパールやインドへ運ぶのに、往復半年もかかる。常に厳しい天気のもとで、野獣との戦いもある世界中で最も険しい道として存在していた。一名「ティーロード」とも呼ばれた「茶馬古道」が、文明に果した価値は西のシルクロードに負けずとも劣らないほど大きいと考えられている。麗江は、その「茶馬古道」の重要な中継地として長い間繁栄していた。

麗江が交易で繁栄していた理由は、やはり麗江の地理的位置と恵まれた自然環境にある。豊かな自然と一年中暖かい気候の上に、麗江の東は四川省の攀市^{pan shi}と涼山^{liangshan}イ族自治区と隣接し、南は大理白^{da li}族自治区に続き、西は怒江^{nu jiang}リス族自治区と隣接、北は迪慶^{di qing}チベット自治区と繋がっているから、麗江は中国大西南地区の古代「茶馬古道」^{cha ma gu dao}と古西南シルクロードとの間の最も重要な経由地となった。

特に現在の麗江古城区の古城大研鎮は、以前から東西南北からの品物の集散地であって、豊かな地元の品物と茶馬古道の品物を交換する市場として繁栄した。一年中温暖な気温が続く麗江坝子¹⁾は、茶馬古道の中でも最も自然が厳しいチベットへの道の入り口に位置している。

麗江から北へ進むと年中雪が積もっている険しいヒマラヤ高山地帯に入る。「荷馬隊」^{he ma dui}が一旦チベット地域に入ると、過酷な自然の中を通らねばならないので、目的地であるネパールとの国境線まで少なくとも片道三か月の日数を要する。出発前の準備や帰ってきた時の息抜きは、全て麗江で

*中部大学国際関係学部中国語中国関係学科

行うことになる。ここで旅行中の必需品や商品を揃え、持っていく商品「茶・家畜・薬剤等」は、麗江で買い求め、最良の驢馬を選び、旅行中最も重要な娯楽の道具である「楽器」を買う。そして、仕事のパートナーである驢馬とともに麗江坝子の旅館で体力を整えてから、万全の準備をした後に長い旅に出かける。帰ってくる時に持ち帰ったインドやネパール、外国の品物のシルクや金属品や塩等を、ここで売ることもできる。商売の得意な地元のナシ族(納西族)の人々は、自分の才能を発揮し、旅人のためにあらゆるサービスを提供し、旅館業・飲食業・販売業などを営んでいた。暖かい麗江坝子は茶馬古道での荷物隊の心の天国であった。旅館業と商業の繁栄で麗江古城は、漢、蔵(チベット)、ナシ、などの多文化の交流点となった。

「茶馬古道」はいつから始まったのか、だれがこの道を創ったのか、その答えはどこにも記録されていない。最初に茶馬古道の存在について記録したのは班固²⁾が書いた『漢書』(紀元82年)であり、その中には次のような記述がある。

「紀元前138年、張騫^{zhangqian}が漢武帝の命令に従って西のシルクロードを開通するため西域に出かけたが、その時既に直接インドから雲南、四川へ入る一つの商路があることを知った。西域から帰国後に、武帝に我が漢の領域の中、西南部の山の奥にインドやペルシャなどの国との貿易ルートがあることを報告した。武帝がこれを聞き、西南地域を開発することを決意し、その後多くの使者を雲南に派遣した。しかし、派遣された使者は殆ど雲南の昆明当たりの原住民によって殺害された(後略)(木 2004 pp. 20 ~ 21)。

張騫が発見したその貿易商路が実は「茶馬古道」であった。つまり西のシルクロードより200年も早く、今から約2000年前に、既に雲南省はインドなどの国と貿易を始めていたのである。

「茶馬古道」の起源は唐・宋時代の「茶馬互市」(チベット族の馬と雲南人のお茶を交換する市場)という時から始まった。当時の起点は唐「南詔国」の首都現在の大理であった。この関係で大理、麗江、中甸(シャングリラ県)、啊墩子(德钦)は、茶馬古道の重要経由地となった。明・清時代になると茶馬古道はいっそう輝く時代に入った。

第2次世界大戦中は、日本軍が中国の海上貿易を封鎖したため、アメリカ軍が中国人民解放軍と中華民国軍に物質を提供するのに、茶馬古道は大変役に立った。インドから昆明や成都までの道は蜘蛛の巣のように中国の西南部に広がり(李2000 pp.15)、経済も繁栄を極めた。

茶馬古道には次に示す二つの路線がある。

- A. 「滇藏道」(雲南—チベット道路): 雲南省の茶の産地「普洱」^{pu er}から出発し、西 双 版 納 — 思 茅 —
^{lin cang} 臨 蒼 — ^{baoshan} 保 山 — ^{da li} 大 理 — ^{li jiang} 麗 江 — ^{di qing} 迪 慶 を 経 由 し て チ ベ ッ ト の ^{chang du} 昌 都 — ^{la sa} 拉 薩 (ラサ) — そして国境を超え、
 ネパール、インドを経由してトルコやヨーロッパにたどり着く。
- B. 「川藏道」(四川—チベット道路): 険しい道として知られている。四川省の雅安^{lu}を出発し、
^{ding kangding} 定 康 — ^{matang} 康 定 — ^{gan zi} 馬 塘 — ^{gan zi} 甘 孜 — チベット^{chang du}の昌都で雲南からきた道と合流して—
^{cha o} 察 隅 — ^{bou mi} 波 密 — ^{lin zhi} 林 芝 — ^{la} 拉

sa
 薩、さらに中国の国境を越え、ネパール、ブータン、さらにネパールやブータンを経由してインドやアフガニスタンにたどり着く。その全長は7300華里（中国式の距離法：1華里=500メートル）である。



茶馬古道の路線図
 (出典)『中国地理紀行の地図』をもとに筆者作成

「茶馬古道」は四川省、雲南省、チベット族自治区の三省を緊密に結びつけている。チベット人は今でも漢民族のことを「甲米^{jia mi}」と呼んでいる。チベット語では「お茶を生産する人、あるいはお茶を販売する人」という意味である。「茶馬古道」の一回の往復だけでも半年はかかると推定されている。一千年の間、茶馬古道は驢馬と運び人が活躍していたが、1950年代頃、「滇藏自動車道路」と「川藏自動車道路」が完成すると、茶馬古道往来の賑わいはようやく消えていった。しかし、険しい山岳部では、一部の短距離運搬は、今も荷馬隊に依存している。

2. 「茶馬古道」における文化の融合—ナシ文化の形成

ポーランドの学者マリノフスキーは、文化について次のように論述している。「いかなる文化でも、多種多様な文化的要素から構成されている。各要素は相互に依存し合い、制約し合い、厳密なネットワークに支えられ、そのうえ独自の展開や社会的効果を発揮しながら、所属する民族に働きかけている」(マリノフスキー 1987 p.14)。

筆者が長年研究している、ナシ族により長年継承されてきた漢民族の儀礼音楽である「ナシ古楽」は、まさにそのとおりの役割を果たしてきた。茶馬古道の繁栄で多くの他文化がナシ族の文化に与えた影響は大きかった。単に驢馬の背中に商品を載せて運搬しただけではなく、文化も流入し、相互の交流を促進していた。長い年月を経て、茶馬古道は漢族、チベット族、ナシ族、バイ族、イ族など多種多様な民族の居住地を結び、品物の貿易と同時に各民族間の文化交流に重要な役割を果たしていたのである。

麗江は重要な中継地として内陸の漢民族文化とチベット、インド、ネパールなどの文化を吸収し、茶馬古道の出発地である四川省の「川(四川)文化」、南昭国であった大理の「白族文化」、と自民族の民族文化とを混在させていた。つまり、麗江には中原、チベット、四川(蜀)、雲南の四つの特異な文化が、同時に一か所に存在するという珍しい文化現象が生じていたのである。

長期間、多文化の積極的な醸成がなされたことは、ナシ族の首長[酋長]である「木氏土司」の存在と緊密な関連がある。「木氏」は明時代の時に皇帝から戴いた名前で、「土司」は歴代王朝が主に中国西南の少数民族首長に対して与えた世襲の官職であった。土司は「土着」の官ということからこの名がある。少数民族に対する間接統治制度はすでに唐代の羈縻州制³⁾において確立されていたが、明代の土司制度によってほぼ完成した。清代以後、土司を中央直接派遣の非世襲的な「流官」に改める「改土帰流」が進められたが、雲南辺境などでは大土司を小土司へと分割する政策がとられたため、かえって土司制度は民国時代まで存続し、新中国成立時に最終的に廃止された。

麗江にいる木氏土司は漢族の儒教的教育を熱心に学ぶとともに、それ以外のチベット、バイ、川などの文化を自分たちの民族文化の中に積極的に取り入れた。木氏土司は弱小のナシ民族の安全を確保するために、隣接のバイ族・チベット族と頻繁に交流を行った。この事実は麗江の北岳廟に祭られている仏像によって示唆されている。ここには大神龕の中央に麗江のシンボルとなる玉龍雪山の神「三多神」の像とともに、両側には穏やかな表情をした三多神の妻像も祭られている。一体はチベット族の女性で、もう一人はバイ族の女性である。トンバ経(「東巴教」ナシ族土着の宗教)のナシ族の造世史に書かれたチベット、ナシ、バイの三族は実は三兄弟であるという伝説や、千年の間の三民族間の良好な関係を象徴しているのではないか、との推測もなされている(阿向 2004 p.42)。



茶馬古道重要経由地シャングリラの郊外にある松贊林寺(チベット寺院)の
入り口に描かれているチベット風楽器「遠古篤」²⁾を持つ四天王
(出典)2006年8月筆者撮影による

上述してきたような文化的融合は、筆者が研究している「ナシ古楽」の中にも明確に表れている。筆者が調査している「大研鎮ナシ古楽団」で使われている「磬」^{QING}は、大理を通じてチベットから麗江に伝来したという説のある打楽器で、表面にはチベット文字が彫られている。しかし、実際にその楽器で演奏している曲は漢族が密集している四川省にある道教音楽である。古楽以外にも、このような文化融合の特色はナシ族の建築・壁画などにも見られる。

3. 結び

多くの民族文化の移動を可能にした西南シルクロードである「茶馬古道」の影響、麗江地区の文化は非常に多元化となり、古代漢民族文化と少数民族文化が蜘蛛の巣のように入り混じっていて、独特の文化現象が形成された。茶馬古道は多文化共生という文化背景の下に生まれ、これからもそうになっていくことだろう。人類の遺産である茶馬古道文化圏に残された貴重な文化遺産をどのように発掘し保存していくのかは、われわれ研究者が今後取り組むべき重要な課題だと強く感じている。

注

- 1) 坝子(bàzi)中国雲南省黄洲省地区小さい盆地に対する呼び方。
- 2) 班固(32-92):字は孟堅(陝西省咸陽の人)。後漢の著名な歴史家、文人。代表作《漢書》。20年余りの時間をかけ、建初七年(82)に《漢書》を完成。本書は総計100篇で、漢高祖6年~王莽地皇4年までの230年の歴史を記載している。
- 3) 羈縻州制:(きび政策)中国の唐王朝によっておこなわれた周辺の異民族に対してとった統御政策の呼称。各地に都護府を置き、中央から都護を派遣する一方で、原地の部族長を都督などに任命して自治を許す政策である。
- 4) 速古篤(SUGUDU)と鈴子(LINGZU)両方ともナシ古楽の主要楽器である。

参考文献

(1)中国語文献

- 阿向(2004)「北岳廟与三多節」『玉龍山』編集部出版。
- 袁炳昌・馮光鈺(1998)『中国少数民族音楽史(上)』中央民族大学出版社。
- 『茶馬古道』編集部編(2003)『茶馬古道』陝西師範大学出版社。
- 知 了(2005)『香巴拉』(麗江市市長專訪)東方航空。
- 張仲裁・楊杰(2004)『中国通史』中国書籍出版社。
- 趙淨修(1994)「麗江洞經音楽の伝人」麗江県政協文史資料委員会。
- 『麗江文史資料』(1994)第十三集 麗江県政協文史資料。
- 『東巴象形文常用字詞訳注』(1995)中国云南出版社。
- 張興榮(1998)『雲南洞經文化—儒道釈三教の複合性文化』雲南教育出版社。
- 徐文徳(1999)『明実録雲南事迹纂要』雲南大学出版。
- 徐 霽(2000)『雲南図典—麗江』人民出版社。
- 『香巴拉』雑誌社編(2006)『香巴拉—第5刊・第8刊』香巴拉雑誌社出版。
- マリノフスキー著・費孝通 訳(1987)『文化論』中国民間文芸出版社上海辞書出版社。
- 亮炯・朗薩(2004)『恢宏千年茶馬古道』中国旅遊出版社。
- 中国雲南省美術出版社。

(2)日本語文献

- 中国地理紀行編集部編(2003)『中国地理紀行(13刊)—茶馬古道』中国国家地理雑誌社。
- (2002)『中国地理紀行(2002・2)—チベットドライブガイド』。
- 堀江義人(2006)『天梯のくにチベットは今』平凡社。
- 亀井高孝・三上次男・林健太郎・掘米庸三編(1995)『世界史年表・地図』吉川弘文館。
- 柴田南雄(1983)『楽器への招待』新潮社出版